

# 大杉谷国有林からの手紙

## 3通目 ~大杉谷国有林について~

大杉谷は、山開きを迎えました。木々たちも新芽が顔をだしはじめ、林道端のあちらこちらには、普段は見れないピンクや黄色の花が見え始めています。

皆さんに使っていただく登山道は、4月22日から11月24日まで開山の予定です。

今年もたくさんの方々が、この大杉谷を訪れ、雄大な自然に抱かれ魅了されるのでしょうか。

2通目のなかで、「大杉谷森林生態系保護地域」を設けて、貴重な地域として保全管理を行ない、かけがえのない豊かな自然を未来へつなげていく・・・これも私たちの仕事であるとお話させていただきましたが、今回も引き続き、もう少し大杉谷国有林のことについてお話をさせていただきます。



この地域は、8世紀頃には、伊勢神宮の造営用材の山「御そま山」としての記述ある



ように、これまでも、紀州藩領、御料林（皇室所有の森林）として、渓谷を流れる宮川を活用して資材の供給を行っている森林でした。そして、昭和22年の林政統一により、大杉谷国有林となりました。

現在の大杉谷国有林の面積は、約4,380ha、水源涵養保安林、保健保安林、鳥獣保護区、カモシカ保護地区、吉野熊野国立公園、ユネスコエコパークとして、森林法、自然公園法などの法律で、宮川の源流部にあたるこの国有林

の保全が図られています。森林としての特徴として、標高約320mの水越谷出合から標高1,695mの日出ヶ岳山頂まで、実に1,300mもの標高差があり、大杉谷国有林では、暖温帯林から亜寒帯林までの多様な森林が連続して見られることがあげられます。

①標高の低いところでは、常緑カシ類を主体とする森林が成立しています。標高約800mの七ツ釜滝付近まで、アラカシ、ウラジロガシ、アカガシなどの常緑のカシ類、タ



ブノキを主体とした暖温帯の常緑広葉樹林がみられます。

②標高約800～1,350mにかけて、モミ、ツガ、ヒノキを主体とする暖温帯の常緑広葉樹林の上部から冷温帯の落葉広葉樹林の下部にかけて見られます。

③標高が、1,000mを超えるあたりから山頂近くにかけてブナ林が見られます。高木層は、ブナやミズナラ、ヒメシヤラ、ミズメ、オオイタヤメイゲツなどの落葉広葉樹に、

モミやツガ、ウラジロモミ、コメツガなどの常緑針葉樹が混ざっています。

④大台ヶ原山の山頂に近づくとつれ、トウヒやコメツガ等の亜高山帯の針葉樹が優占した森林が見られるようになります。

このように素晴らしい森林なのですが、残念な変化が起きている、正木ヶ原から大台ヶ原山にかけて、樹木の立ち枯れが急速に広がっているのです。

林床にコケ類が発達し、鬱蒼とした森林は、現在では、なかなか見ることができなくなりました。

昭和34(1959)年に全国に多くの被害をもたらした伊勢湾台風は、大台ヶ原の周辺にも大きな被害をあてました。倒木などで立木が



まばらになった林内は明るくなって乾燥し、林床にはコケにかわってミヤコザサが侵入してきました。ミヤコザサが優占する林床には、これまでの幼木がほとんど見られなくなり、更新の仕組みがうまく機能しなくなりました。

さらに、ミヤコザサを餌とするニホンジカの頭数が増加し、残った樹木の樹皮や幼木植林した針葉樹の苗木までも食べて枯死させる現象が増えて、周りの森林のさらなる衰退に拍車をかけていくこととなっています。

この大問題に対して、三重森林管理署では、様々な取り組みを行っていますが、そのことについては、次回の4通目で紹介させていただきます。

**(発行:三重森林管理署 尾鷲森林事務所 地域統括森林官)**